



一万五千キロ傳道の旅

—全日本を走り廻つたラクータ

武藤 富男

手をあげるチャブレン

終戦の年の十一月の或日、私は東京YMCAのホールで開かれたチャブレン(海陸軍附教師)の集りに出た。私の創立した日米会話学院の学生の爲「キリスト教とは何ぞや」といふ講演をチャブレンの一人に頼もつといふわけだつた。

学校の宣傳をいくさりやつて、さて誰かこの講演を引受けてくれる方はないでしようか、といつて二十人程集つたチャブレンを見渡した時、紺の海軍服を着た若い美男子が手をあげて承諾の意志を表した。間もなく彼は學校に来て連日三回に亘る講演をしてくれたが、信仰に燃え発言は美しく盛

旨は明快で若い人たちの心を引いた。私は彼を自宅に招いて十々々きを振舞つた。その席上私たちは、原爆とヒトラーとドクター・カガワについて率直に意見を聞かされた。私は彼の鋭見の簡過なのに驚いた。

それから十数日して彼は突然私を訪れて随先で私の顔を見るや、「ドクター・カガワから君のことを聞いた。君は戦争犯罪人になるか?」と問うた。「なるかも知れぬ。覚悟はしている。と答える、彼は「もしも」の時には載せてくれ。自分はすべてを抛つて日本に来て君の辯護人にならう。」と申出た。三回の会見で、私の魂は彼の魂にふれた。彼は強なく補國したが、別れる時自分

の主宰する樂園を引つれて必ず日本傳道に來るからと約束した。私たちは祈つて別れた。この人物が、当時三十一歳のローレンス・L・ラクータアであつた。

スケジュール ファンダフル

一九四九年の暮、ラクータアから手紙が來た。六千五百ドルを、自分と妻と二人の婦人團員とが生活費を節約して積み立てた、これを以て三月乃至五月に亘り日本全土に音楽傳道を敢行したいから計画を立ててくれといふのであつた。

傳道は教会を中心とし教會の力によつてなされなければならないので各方面に折衝した結果、日本基督教協議會がラクータア一行を招聘することとなり、キリスト新聞社が事務一切を引受け、各教派の代表と新聞社の代表とを以てラクータア委員會が結成された。ラクータアは私に演説を引受けてくれと依頼して來た。私は彼が私の辯護人を引受けること申出た友情を思い、私の関係している一切の仕事を抛つて通訳のみならず事務の処理一切を引受け、全生活をこの傳道に

打込む決心をした。

そこで先ず發着について問合せるとハーブ・インバ三四でキースを入れると重さ一トン、体積は三百立方フィートあることがわかつた。これを日本全土に持ちまわるにはトラックによる以外に方法はないと見たので、トラックの車体に鉄製の箱をつけ、屋上を舞臺にして野外演奏をやる様に仕組み、図面を畫いて彼のものに送つたところ、彼からは幅八尺、長さ十四尺、高さ八尺五寸あるトレーラー(緩急四、冷蔵庫、シャワー、台所付)の圖面が送られて來た。トレーラーは乗用車が牽引し、屋上に補助舞臺がついていて、野外集會がやれる様になつてゐるのである。図面があまりに大きいので、日本の道路を通れるかどうかについてはいささか不安であつたが、馴れない日本の宿屋に泊らずにむこの便を思い、これを持つて來る様にといつてやつた。

次はスケジュールであるが、日本全土を



写真はラクータア氏(向つて左)と筆者武藤氏

ることとなる。人口三万以上の都市でツアーの訪問を受けたいものは少いといふことになる。道路については自信はないが、トラックの通れるところならトレーラーも

通れるだろ、と前提の下に日本地圖に印をつけ、一週間を以つて百五十日の日程を作り上げた。之をラクータア委員會に提出して審議を求めたところ、色々と意見が出た。本人が何というか、アメリカに於つて本人の意見を求めようといふことになり、四月になつてスケジュールと地圖を送つたところ、ラクータアから「スケジュール・ランダフル」という電報が飛び込んだ。これで全日本傳道の構想は出来上つたのであつた。

東條演説以來の大入り

六月二十一日にローレンス・ラクータア、ミルドレッド・ラクータア夫人及びオストランド、シーシヨア両氏の計四名から成る一行は横浜に入港した。各新聞社、ニュース映画、放送いずれも大々的に宣傳をしてくれた。このことはラクータア傳道の成否を決定した。船の上にある時は問題のトレーラーは小さく見えたが、慥々其英國道を東京に向つ

テラーと乗用車で引張つて行く時、この大きな団体で全日本を踏破するのはなかなかの難事業だと腹を決めた。なお東京に着いてからステーションワゴン（荷物兼乗用車）一台を入手し、結局フォード乗用車がトレーラーを引き、もう一台のステーションワゴンがその後について都合三台で全日本を旅行することとなった。

全東京クリスタンのための集會、近江八幡まで八日間わたる試験的傳道旅行、東京における七月十二日より十五日までの大傳道集會を終えて、私共は七月十六日都廳至日本音樂傳道の旅路についた。

一休夏のさなかに関西から九州に向うとは何事か、先ず北海道、東北に行くべきではないかという非難があつたが、日本の心臓部は関西、九州である、我々の旅は觀光ではない、傳道である、だから、神武東統ゆかりの地から開始して、余力を以て北に向うのが正しい、暑熱の苦しみは、傳道のためには忍ばねばならぬという考えであつた。

東海澤各地を経て関西に入ったのが七月

二十一日、二十三日大阪中之島公会堂における大教會連合主催の音樂傳道集會は屋内集會中の最も盛大なものであつた。日本一を誇るこの公会堂には満堂の聴衆を容れ、入口に流れ、まわりを取り巻いた聴衆を合すれば無慮七千。舞台裏で電氣の番をしてゐる一老人は歎じて曰く、「東條英機が開戦直後ここに來て演説をよつた時この様に沢山の人が入りました、それからこのかたこんなに人が入つたことは、九九年目の大入りですよ。」

山陽道で苦しむ九州へ渡る

七月二十五、二十六兩日の神戸における野外集會は計一万五十の聴衆を集め、次で岡山、倉敷を訪問し、福山、尾道に向う途中、トレーラーは山陽道の難所にかかつて苦んだ。それは峠でもなければカーブでもない。笠岡、六條院、金浦と三つの町が続き、道路は毛利、鳥津の段礫が通つた當時そのままの狭さ、否、両側に電柱が立つたので徳川時代よりも狭い。トレーラーが岡間の軒すれすれの箇所があり、しかも自

轉車、トラフックの通行は引つきなしというのだから大変なことである、十五キロを進むのに二時間半もかかり一同へとへとなる。それが集つて三十日朝尾道でタクシー夫人とオストランド嬢と胃腸を苦し、トレーラーの寝台から起き上れなくなつてしまつた。この大傳道計画も尾道でおしまいになつてしまふのではないかと心配したが、漕ぎ直になつてタクシー夫人はむづくりと起上り、絶食のままステーションワゴン（飛行兼荷物車）のハンドルをとり、呉まで行つて集會をやると言い出し、六時間ドライブをつづけ、一行は午後七時異府、八時から集會、オストランド嬢もベッドより起上りトロンボーンを吹く。これでスケジュールをかきすにすぎ、廣島、徳山、山口、下関を経て九州に渡つたのが八月五日。福岡を探出しに信保保、長崎、熊本、鹿児島と進んだが、休むと一日の疲労強い強行軍のため、タクシー夫人と私は漸く甚だしくなり、タクシー夫人と私は屢々スケジュールのことで小せり合ひを演じたが、キリストのための仕事であるから

いつもしましには話がまとまり、殆んど不可能と思われた日程をやりおせて都府を総て、八月十六日宮崎まで進んだ。この時南九州には無車が三つ落ち、延岡への道は全く杜絶してしまつた。最早進むことも出来ないし、さればとて退けばマシユールに大きな狂いが出来た。遂にトレーラー一台、自動車二台を貨車運みにし、八月十七日宮崎から延岡まで運んだ。トレーラーを貨車に積みマシユールを通れるかどうか心配したが、丁度すれすれでトンネル通過、延岡の集會も予定通りやる事が出来たが、貨車費二万九千九百円とられたのは驚かつた。

北九州を震撼し 山陰に向う

八月二十一日より二十四日まで小倉、門司、田川、八幡等の北九州の産業の中心地においては、いずれも野外集會が開かれた。小倉、門司では

毎日新聞社の後援の下に、いずれも野球場を会場にしたが、八千人、九千人という大衆がスタンドを埋め主催者側の牧師、信者の方で却てびつくりする始末、崇徳の中心、



トレーラーの上で傳道する一行……三島にて

田川、中間においては虎夫と其の家婆とを六千人も集め、ハープとマリリンの妙音を聴かせ、タクシーの轟轟に耳を傾けさせたのは嬉しいことであつた。八幡は市街の真中電車道に開かれた市民廣場で集會もつたが、無道一方の人が廣場を埋め電車道にまであふれ、警察署長がトレーラーの横上になつて敬禮の辞をのべ、乗衆の音と轟音を語る由とは春の騒音を消して人々の魂を捉ふるに十分であつた。

八月二十五日、東京出発以來初めて山口の湯田温泉に疲れを休め、二十六日には外國傳道者の足跡を印すること稀であつた山陰に向つた。萩を皮切りに益田、出雲、松江、米子、鳥取各地においてクリスタンと市民との歓迎を受け盛大な集會をもつた。

鳥取からトレーラーをもつては宮津又は福知山に直送行けないため、止むを得ず一旦姫路に出て生野を泊り二日ばかりで福知山に着いた。ここから鶴岡に行き教費に入つた時、九月三日のシェン嵐風によつた。風速四十五メートル、颯嵐の中心にあつたにも拘らず、神の導きと人の助けによ

り難難よろしきを得て事なきを得た。

北陸路にて車体破損す

福井、金沢、富山の三都市はいずれも屋
内集会だつたが素晴らしい成果をあげ、富
山から九月七日、狼知らずの險を越えて直
江津に向つた。直江津の手前十キロにおい
て、フォードとトレーラーとをつなくヒッ
チ(通稱)はゴキリと折れてしまひ、遂に
トレーラーを村上に残してフォードのみで
直江津に行き、ヒッチを修繕して取つて返
し、も一度トレーラーに連結し夜晩く直江
津に入つた。翌八日直江津で屋外集会、こ
こから長岡、三條、荻野、新発田とやり、
十三日村上に向つた。村上に近づくや、フ
ォードのバンパーは垂れ下り、トレーラー
ヒッチは地面に引ずるに至つた。これはフ
ォードの後のアラムに懸つた。これはトラ
ーの重量に堪へることが出来ず曲つてし
まつたため、今度の旅行にとつては致命
的打撃かと思われた。しかし私共は驚落ち
せずスピードを一時四五マイルに落して南
く村上に辿りつき、夜九時集会の終つた後

難路三崎峠を越えて北上

三崎峠は山形、秋田の縣境にあつて路面
に山嶺が露出し、一かかえもある大石がい
くつも頭を出しており、しかも勾配は急で
ある。日本自動車協会の野口正一君は予め
酒田士大出張所を動かしてトラックに材木と
砂利を積み人夫四名をのせて現場に先行し
道路を作りつつ進み、どうしても通れない
ところには材木を渡すといふ放れ葉をや
り、二キロ進むのに二時間を要してこの難
関を突破することが出来た。

秋田の屋外集会に恵まれて聴衆八千人。
ここから能代、大館、弘前、青森とやり、

れも本人がトレーラーの覆上に登つて挨拶
し予ばらしい成果を収めることが出来た。
かくて一関を経て塩釜、仙台とやり、山
形、米沢を訪れ、粟子峠の險では荷物を一
切下して三度に分けて運び、
福島、会津、郡山、宇都宮、
日光を訪れて、十月十四日福
京、出発以來九十日を費して
本州、九州、北海道の巡回を
予定通り終つた。

全日本の巡回を 終る

かくて十月下旬は甲信及東
京附近を巡回し、十月終りよ
り十一月初めにかけ十日間に
亘り青山学院講堂で連続集会
集会を開き、二十回の前後と
二十回の間にもより日本初
めての連続集會傳道を行い、三万の会衆を
集めて驚異的成果をあげ、十一月十日東京
出発、四國傳道の壯途に上り、今度は車二
台でトレーラーなし、一日百五十キロを走



写真は向つて左からラクーア夫人、オストランド嬢、
シーシヨア嬢……秋田にて

独創力と実行の人ラクーア

ローレンス・L・ラクーアは本年三十二
歳、両親は今尙健在で、
母はマリナを産み、父
は説教をなすつ巡回傳
道をしている。

ローレンス・ラクーア
が私に告白したところによれば、彼は若い時大へ
んガールズ(娘たち)にも
てたものである、そのた
め身をあやまることだ
つたが、母の祈りによつ
て信仰をとり戻し傳道に
献身するに至つた。夫人

二人の間には信仰と音楽によつて結ばれ
た強烈な戀愛があつたにちがいないし、今
もつて二人同士の間に健びる生活をしてお
り、見ていてこちらががれる位であつた。
ケジュールに組んだ字室は一つもかかま
やり返けた。
かくて十二月十一日、貨物船コンテス
号に乗つて一行は輪國の途についたのであ

ラクターは、すばらしく雄大な精神力をもち、その夢を実現する実行力を備えている。自ら車を運転し、マリンスを弾き、わかり易く、面白く、それでいて静みのある説教をやる。集会が終つてから質問者が現れると、夜の十時にならうが十一時にならうがまわりたい、質問に答へ、勸めをなし、手をとつて歸り、人をキリストのもとに導かなければやまない熱情をもっている。

彼はもつている全財産を三台の車と樂器とに代へて日本に來たが、婦りがけにはハープだけ残して他は皆賣拂つて借金を返し、残りの金をもつて國に歸り、それで車と樂器とを譲渡し又傳道を始めるのだといつて、私の持つてゐるものは皆神のものだから、生活が立つだけの財源があれば十分だ、というのが彼の人生観である。

それでいて世界の大勢を長、時局を知り人も、事務処理の能いすかたチキヤをもつと、組織と政治の力にすぐれてゐる。欠点といへば氣の短いことで、時々私とぶつかつては氣遣はんかみだいた喧嘩をしてあとを互にあまきり合ふことがあつた。

彼の訓話を聞き、キリストを信する者には、救案ある一婦人は後になつてを教へ彼と結婚した。彼は遂に献身して傳道者と

日本傳道は彼の一生にとつて一つの道標をなすものであり、彼の信仰、人物にも何物か大いなるものを與へたことは確かである。彼の人物と事業が今後アメリカにおいて、又日米兩國のキリスト教の世界において、どういふ風に展開するかは注目し得るが、彼が近い將來アメリカにおける傳道界の大立物となるは必定である。

彼の妻 Mildred ラクターは毎日ステーションワゴンを運転し平均五時間、多い時は十時間、それも天下の雜踏を越えてドライブする。ドライブの最中同乗二婦人と共に日本語のさびかを練習し、次から次へ二婦人に本を讀ませてそれを傾聴し、会場に着くや樂器の組立をなし、ハープ、マリンスを弾き、すべての伴奏をピアノ又はハープでやる、それでいて詳細な旅行記をしるし、休息の暇もない。私は先ずその体力に驚かし、その音楽の天才へ感嘆して皆稱讃でやる。を讀み、更にその同等力に圧倒された。彼女を動かしているものは強烈なる信仰の力と、父母よりうけつたが勞作的な生命力である。いとほしな頼むな指

なり、三十余年の生涯をキリストに捧げつて、昨年天に召された。私はこの心算をこの眼で見た。それは私の妻の Mildred

大統領と靴

アメリカの南北戦争時
リンカーン大統領は、イギリス大使ライオンズ卿に、前線にゐるから訪ねて来て下さいといつた。
二人は、一夜を田舎の假小屋に過したが、翌朝、大使は、大統領が自分で靴を磨いてゐるのを見てびっくりした。(合衆前の大統領が、自分で靴を磨くんですか。リンカーンは答へた。自分の靴を磨かずに、誰のを磨くのかね)

世界一の内陣

世界に有名な教会も多
いが、建築に巧心のある人は、その種々なる様式

映画の世界

今や、映画の世の中。キリスト教会でも、もつと映画を利用せねばならぬ。世界の映画館の座席は、合計四千四百万だをうで、その中、あの小さな路傍屋のモノが第一で人口子につき一九二

百万非の聖書

所謂ゲーテンベック・マイアの完全な複製版は、世界にわたつた三冊で、一冊はロンドンの大英博物館に、一冊はパリの国立図書館に、残る一冊はワシントンに、残る一冊はワシントンに、残る一冊は、六百四十一巻で三巻になつてゐる。一九三〇年に得られたもの。贈物の専門家は、少くとも百万冊の儲りもあるだらうといつてゐる。

を以て發するハープの妙音の半面に、すさまじい生命の補助力のあることを、私は彼女のうちに見たのである。
彼女は何事も合理的でなければ承知せず太平洋戦争の原因についても、占領政策についても、共産主義に關しても、日本及び世界の將來についても、私にとつて好個の論敵であり、互に齒をむき出し、指をつきつけ、凄い形相をして睨み合いながら理論闘争をやつた。時に彼女の攻撃は私の急所を打ち、私はお面を一本とられてタジタジとなり退いて陣容を立て直さなければ再び立ち向うことの出来ないこともあつた。

一行が旭川の刑務所において五百人の囚人を前にして演説をなした後、ラクターは監獄の中において囚人たちに語つた。「今より七十二年前、米國モンタナ州に一人の子供が生まれた。彼の父はのんだくれで酔つては妻を打つた。七歳の時母が死んだのでこの少年は養子で浮浪児となり、幾度も牢に入れられたが、二十三歳の時殺人罪に關わり十年の刑に処せられ獄に入り、三十二年にして出獄した。そして初めて路傍で

下の父である。この言葉に五百の囚人は声をあげて泣いた。私が最も心を打たれたのは、レオンティン・オストランド及びロイス・シーショア両嬢である。この二人は困難な旅行中一度もいやな顔をせず、常にほほえみを以て演説をなし、樂器の組立、片附をやり、トレーラーを押し、消作りの手帳をなし、我々日本人がアメリカ女性に対して懐いている觀念を全く一変せしめた。神に仕える女性はいかにもあるかといふ感を抱く人々に與えその人物と行いによつて無言の傳道をなしたのであつた。

ラクターと三人の婦人は五カ月の間に五十万三千百人の人たちに聖書をきかせ、キリストの福音を傳へた。彼は一九五三年頃にもう一度日本を訪れるかも知れない。その時は誰かな都府よりも、豊村に漁村に傳道のため黙々として困難と闘つてゐる隠れた傳道者たちを助けるために力をつくすであらう。